

## 2. 諫早湾貝類新增養殖技術開発(アサリ)

松田正彦・木村和也\*

### I. アサリ生理状態調査

#### 方法

調査は、諫早市小長井町の2つのアサリ漁場(A, B)で、平成29年4月11日～平成30年3月19日に行った(図1)。調査頻度は大潮毎の概ね月2回とした。



図1 調査位置図

A, B 漁場の地盤高1 m 程度に設けた定点周辺で採取した殻長30～40 mmの商品サイズのアサリ各20個体を試料とした。

試料は殻長、殻高、殻幅、重量を測定後、軟体部と殻に分け、軟体部表面の水分を十分取り除いて軟体部の湿重量(以下湿重)を求めた。また、軟体部及び殻を60℃, 48時間乾燥し、それぞれ乾燥重量(以下乾重)を求めた。

B 漁場については商品サイズのアサリが採取できなかったため、平成29年8月23日～同年12月19日の間は計測できなかった。

乾燥身入率は軟体部乾重を軟体部乾重と殻乾重の和で除し、百分率として求めた。

水分は軟体部の湿重と乾重の差を湿重で除し、百分率として求めた。

なお、乾燥身入率は成熟と栄養蓄積状態の、水分は

#### 結果

栄養蓄積状態(低ければ良好)の指標と考えられる。

A, B 漁場の定点周辺のアサリの乾燥身入率と水分の平均値の変化を図2に示す。

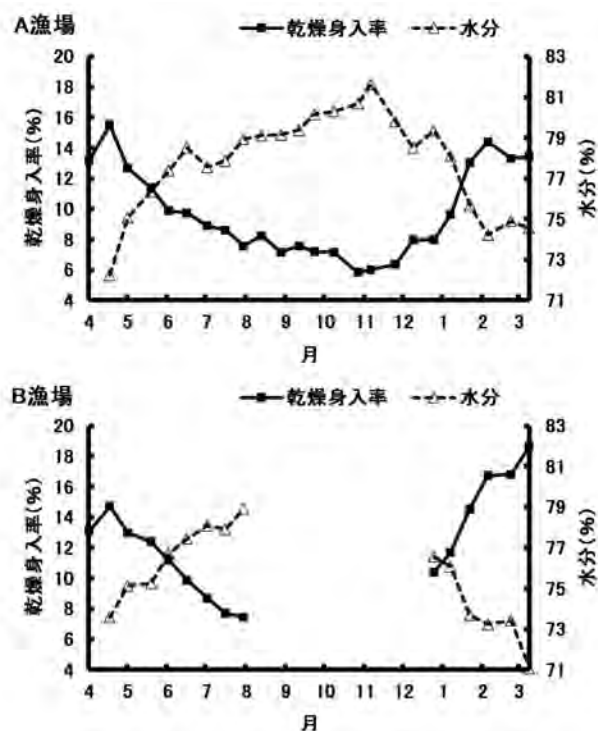


図2 各漁場の乾燥身入率と水分の推移

調査開始当初の平成29年4月11日の乾燥身入率はA 漁場が13.2%、B 漁場が13.1%であったが、同年8月9日にB 漁場で7.5%、11月6日にA 漁場で最小値5.8%となった。平成30年2月15日にA 漁場で14.4%、3月19日にB 漁場で最大値18.7%となった。

水分については、平成29年4月27日にA 漁場が72.2%、B 漁場が73.6%であったが、同年8月9日にB 漁場で78.9%、11月16日にA 漁場で最大値81.6%となった。平成30年2月15日にA 漁場で74.2%、3月19日にB 漁場で最小値71.1%となった。

\*株式会社日本ミクニヤ

## II. カゴによる生残状況調査

### 方 法

調査は、諫早市小長井町の2つのアサリ漁場(A, B)の地盤高1m付近で殻長27.6mmのアサリ120個体をポリエチレン製のフタ付カゴ(約0.12m<sup>2</sup>)に収容し、平成29年6月7日～平成30年2月1日に行った(図1)。生残状況の確認は月1回とした。

### 結 果

カゴ内のアサリ生残率の推移を図3に示す。

調査終了時の平成30年2月1日の生残率はA, B漁場とも20%であった。試験を開始した6月から10月

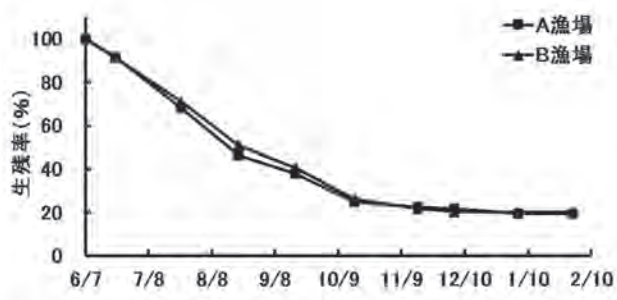


図3 アサリ生残率の推移

までに生残率は25～26%まで低下したが、それ以降に目立ったへい死はなかった。

夏～秋季のへい死については、前述の生理状態調査結果から餌料環境悪化による衰弱の影響が大きく、その他の環境(水温、溶存酸素濃度等)との複合的要因と推察された。

### ま と め

- 1) 諫早市小長井町の2漁場でアサリ(殻長30～40mm)の乾燥身入率、水分及び試験カゴによる生残状況調査を実施した。
- 2) A漁場では平成29年11月に乾燥身入率が最小値となった。
- 3) 平成29年6月に開始した生残状況調査では同年10月までにA漁場75%、B漁場74%がへい死した。
- 4) 平成29年夏～秋季のへい死は生理状態の結果から餌不足による衰弱の影響が大きいと考えられた。

(担当：松田)